

『#日航 123 便墜落事故 JAL 裁判』（青山透子著）を読んでみた。著者は日本航空 123 便墜落事故を追及するノンフィクション作家。元日本航空 客室乗務員。航空史上世界最多の死者を出した日本航空 123 便墜落事故について、事故調査委員会の調査結果に疑問を抱き、自ら各方面へ調査を行いその結果を出版している。

この事故について聞くと必ず#坂本九を思い出す。永六輔が 60 年安保の挫折を綴った曲『上を向いて歩こう』は 1963 年には、SUKIYAKI と題して米国でヒットチャート誌『ビルボード』で、3 週連続 1 位を獲得している（日本語版だそう）。坂本は本来、国内移動には ANA を使っており、当日は ANA 便が満席で、仕方なく確保したのが日本航空 123 便であったという。不運としか言いようがない。そして、その事故の原因が、国が言うような整備ミスでないとしたら、家族の思いは如何ばかりか。

『日本航空 123 便墜落事故』は、1985 年 8 月 12 日、日航機が操縦不能に陥り、群馬県の山中に墜落した航空事故である。520 人の死者（生存者 4 名）を出し、日本の民間航空史上最悪の事故である。原因は「機体尾部修理不良と設計上の欠陥であり、特に機体修理中に使用されたリベットの留め方が不適切だったこと」とされた。

著者たちは、その説明に納得できず、回収されたボイスレコーダー（音声記録装置）とフライトレコーダー（飛行記録装置）の生データ（8 月 14 日 14 時 19 分、残骸の約 1m 下から発見）の開示を求めたものであった（墜落事件から 37 年経っていた）。その説明を覆そうと裁判を起こしたものである。

結果は、東京高裁は遺族側の控訴を棄却した。

本書には、捜索の遅れや自衛隊が米軍の支援を断ったこと、辻褃の合わない説明等、数々の疑問点が書かれている。是非、本書を読んで確認されたい。

著者の著作を複数読んだ結果、私が一番単純に説明できる仮説（オッカムの剃刀）とするのは以下の通りである。

『自衛隊によるテスト用炸薬（信管の作動で爆発させる火薬）無しの模擬ミサイル誤射』である。その根拠として、前日まで国産ミサイル開発中であったこ

と、相模湾に防衛庁護衛艦運転中であったこと、墜落前の日航機とファントム2機の追いかげごっこを住民が目撃していること、中学生が大きな飛行機と小型ジェット機2機を墜落前に目撃していること、外部から11トンに及ぶ衝撃で隔壁を破壊したと想定される所見があること、相模湾で回収された破片から垂直尾翼に高圧の空気が流れ込み破裂させたと考えられる所見があること等が挙げられる。

国が国民に付いた嘘（事実の隠蔽）が残された関係者家族を不幸にし、今も癒されない汚辱を押し付けている。こんな日本でよいのか。怒りが収まらない。